

信濃教育

巻頭言

いい先生

いい先生になりたいと誰もが思う。私もそうだった。いい先生になりたいと思っていた。いい先生になることを願い、目指していた。しかし、ある時にふと考えた。いい先生って、誰にとつてのいい先生なんだろうか。

「先生はいつも私たちを見ていてくれた。」

これはある先生の二十歳を過ぎた教え子がその先生を、いい先生だった、と言うので、私がかつてよかったのと問うた時の答えである。その先生は小学校低学年の時の担任だったようだ。小学校低学年の子どもが、先生がいつも見ていてくれる、と感じていたということだ。その先生がどんなまなざしで子どもたちを見ていたか察しがつく。

「先生はうちの子どもにちゃんと向き合ってくれた。」

ある母親の言葉である。その子はさまざまな問題を起こし、母親には心配と迷惑ばかりをかけてきた。卒業式の後、母親がいい先生だったと、担任について語ってくれた言葉である。その先生がどんな表情でその子に対していたか想像がつく。

いい先生とはこういう先生だ、などがあるわけではない。いい先生かどうかは、子どもや保護者が決めることだ。先がいい先生がいるのではなく、子どもたちの暮らしの中で、いい先生にしていたかどうかである。大事なことは、どんなまなざしで、どんな表情で、どんな思いで子どもに対するかということだ。そして、正しいと思うことを愚直に行うことだ。それはその先生の、子ども観、教育観であり、哲学である。私たちがいい先生になる唯一の方法は、この「観」や「哲学」を磨くしかない。

信州の教師は、教師自身が成長することが子どもの成長につながると信じ、自ら研究と修養に励んできた。これからもそうありたいものである。